

Title	現場の哲学と社会システム論
Author(s)	堀江, 剛
Citation	臨床哲学. 9 P.3-P.23
Issue Date	2008-03-25
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/4572
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

現場の哲学と社会システム論

堀江 剛

社会の様々な領域（医療、福祉、教育、ビジネス、報道、芸術など）において、「現場」の困難や重要性が頻繁に語られる。社会における現場を、どのように理論的に捉えることができるだろうか。また現場に哲学が実際に（実践的に）関わりうるとすれば、それはどのようなものか。本稿では、社会システム論の考え方を借りて（特に「相互作用システム」の概念を梃子にして）、この課題に応えようとする一つの試みである。

1. 現場という言葉の意味・価値づけ

最初に現場という言葉の意味を考えてみる。広辞苑で「現場」の項を見ると、「物事が現在行われている、または実際に行われた、その場所」「実際に作業をしている場所」「めのまえ、まのあたり、実地」とあり、「事故の現場」「現場検証」「動労現場」などといった用例が載っている。今日では、医療現場、教育現場、福祉現場、企業（製造・技術開発・商品開発など）における現場、（デザイン・芸術などの）制作現場、あるいは「子育てという現場」「家族という現場」「地方という現場」など⁽¹⁾、社会や日常生活の中で固有の実践域・活動域を形成している場所・場面を指すときにも使われる。さらに、現場に身を置く人々が“現場はそんなものではない”“現場はそんなことでは動かない”“現場はマニュアル通りにはいかない”と言う。あるいは科学的な実験・観察を念頭に、「物事の事象が起こるのは、実験室などの少なめの条件での環境で起こるのではなく、複雑な環境の下で起こるのが普通である。その原則通りに物事が動かない、現実の個別の場所」⁽²⁾として現場が定義される。以上をまとめると、現場という言葉は、次のような二つの意味を合わせ持っている。

・物事に固有の何かが、現に（実際に）行われ・生み出されつつある場所

- ・ 複雑な環境下で起こる故に、原則通り・思い通りには事が動かない場所

日常の活動域や社会の実践域において、現に事が行われているにもかかわらず、思い通りに動かない場所。このように「現場」とは、私たちが何かを行っていることに関して“分かっているが分からない・分からないが分かっている”といった奇妙な(しかしリアリティに満ちた)事態を指す言葉であるように思われる。それは困難・困惑とともに、何かが生み出されることへの可能性に開かれた場所である。しかしさらに現場という言葉の「価値」的な語り方にも触れておく必要がある。

例えば“医療・福祉の現場から考えることが大切だ”“官僚は教育現場の実態を知るべきだ”“経営者は現場力を重視せよ”“野外科学は現場を見ずして(現地調査なしに)発言してはならない”⁽³⁾などと言われる。このとき現場は、それぞれの実践域にとって見逃してはならない場所、本来の活動が立ち上がる、また立ち上がる“べき”場所を指し示している。現場というものを重要視し、肯定的に価値づけているのである。他方、現場は「組織・機関の最底辺、またそれゆえ汚れた仕事、苦しい仕事、割に合わない仕事が集積している場所というイメージ」⁽⁴⁾を持つと言われる。これは社会福祉の現場に関して述べられている言葉であるが、現場が持つ否定的な価値づけを鮮明に言い当てている。現場は、できればそこに居たくない場所、大変で「割に合わない」場所なのである。

現場が肯定性と否定性が入り交じった「二重価値的 ambivalent」⁽⁵⁾な意味を持つてしまうのは、制度や組織の高度化に伴う管理・間接部門の発達があると考えられる。管理・間接的な実践域は、その領域固有の何か(製造・営業・介護・授業・研究)が「現に行われている場面」から分離されている。つまり現場を否定することによって成り立っている。しかし同時に、実際に活動が生み出されている現場に依存することによってしか、自分たちの実践は成り立たない。この意味で、現場から分離されているが故に、かえって現場を「本来の」立ち返る「べき」場所として捉えざるをえない。こうして現場は、肯定されると同時に否定されてもいる場所として指し示される。

おそらく、この「価値づけ」ないし「イメージ」が、現場に対する関わりを難しくしている。現場に居る人々が、自らの現場をどのように価値づけ・イメージしているのか。直接現場に居ないが間接的(管理的)に現場に関わる人々が、現場をどのように価値づけ・イメージしているのか。あるいは、現場に直接的にも間接的にも関わりのない部外者が、その現場をどのように価値づけ・イメージしているのか。社会における現場の意味・価値・イメー

ジは交錯しており、あえて言えば「多重」価値的である。

直接的であれ間接的であれ、あるいは部外者的であれ、現場に関わる（関わらざるをえない・関わろうとする）のであれば、少なくとも現場における「価値づけ・イメージ」を単純に固定化すべきでない。固定化は、二重（多重）価値的な現場の意味そのものを否定してしまうからである。当然、現場をある種の至上のものとして肯定する「現場主義」もまた、一つの固定化である。しかし、どのように考えれば固定化を回避しつつ現場に関わることができるのだろうか。

2. 社会的なものに対する視点変更：社会システム論

このような「現場」を捉える（また現場に関わる）ために、社会システム論という一つの理論的な迂回路を通ることにしよう。社会システム論は、次のような問いに応えるアイデアの一群として提示された理論である⁽⁶⁾。すなわち「社会」という秩序はどのようにして生み出されるのか。私たちが形成し、その中に何らかのかたちで位置づけられている「社会的なもの」は、何から・どのようにして成り立っているものなのか。こうした問いに対してルーマンは、社会的なものとは「コミュニケーション」から成る「システム／環境」たちである、というテーゼを立てる。

ここで使われている「コミュニケーション」と「システム／環境」という言葉は、極めて独自のタームであり、そこに込められた特異な意味を理解する必要がある⁽⁷⁾。以下では、これらのタームを順に解説することから社会システム論の視覚を簡単に展開してみる。

コミュニケーション：人は、何らかの出来事（特に人の振舞・行動）を弁別し、それに応じるかたちで何らの出来事（振舞・行動）を生み出し、それが弁別されて出来事を生み出し、さらにそれが弁別されてさらなる出来事を...と際限なく続く。こうした「出来事の弁別に応じて生み出される出来事...」という際限のない継起ないし網目（ネットワーク）が常に既に生成している。この生成過程がある限り、そこで弁別される出来事が「コミュニケーション」と呼ばれる。

この「コミュニケーション」概念においては、まず生成過程があって初めて、その要素としての「出来事」が弁別ないし分節されるのであり、出来事が先あって過程が生成するとは考えない。つまり出来事は「出来事を生む出来事」という再帰的な過程にある限りで、

その過程に内在する限りで、一つの出来事である。それはまた、ある要素（出来事）から新たな要素（出来事）を生み出す「演算 operation」と考えることができる。すなわち社会的なものは、コミュニケーションを要素＝オペレーションとする再帰的過程である。

このような過程の内在性に定位した概念は、一般に考えられているコミュニケーションの概念とは大きく異なる。通常、コミュニケーションは情報伝達・意志疎通、ないしその手段と考えられている。そこでは、人の意識・意図・動機に基づくメッセージ内容が前提されている。また、内容を刻み込み・伝えるための物質的な媒体（身体・音・紙・磁気媒体・電波など）が前提されている。これらが、それぞれ独立にコミュニケーションする前にすでにあるものと見なされているのである。ここでコミュニケーションは、内容が媒体を通して伝え・送られるという「伝達モデル translation-model」に立脚している。これに対して社会システム論のコミュニケーション概念は、出来事を生む出来事（コミュニケーションを生むコミュニケーション）としての「演算モデル operation-model」であると言える⁽⁸⁾。

システム／環境：ところで、こうした「コミュニケーション」の継起・網目は、その“際限のなさ”故に、言い換えれば“すべてを見通せない複雑さ”故に、自ずと「パターン」（pattern：真似されるべきもの・傾向・様式・模様）を形づくる⁽⁹⁾。パターンが出来る（弁別される）ことで、そのパターンに応じるか否か、といった比較的単純な応答選択の可能性が生み出される。また、何らかのパターンを“当て”にするかたちで（予期して）コミュニケーションを始めることができるようになる。何らかのパターンに従えば、コミュニケーションはより“確からしい”かたちで進行し、それがまた（再帰的に）パターンを強化する。システムとは、このようなコミュニケーションの「パターン」であると言える。

しかしコミュニケーション過程において、単に様々なパターンが形成されるだけではない。そこではまず、パターンを成さない（当てにならない・確からしくない・意味のない）出来事も、同時に生み出されている。それらはパターンを破壊しうるノイズでもあるが、同時に当のパターンにとって自らを維持・展開・変更するときの外的な刺激としても作用しうる。それはパターンが維持される限りで、パターンを取り囲むように常に存在する。この外的刺激を、何らかのかたちで自らの維持・展開・変更のために利用する高度なコミュニケーション・パターンがある。これを「システム」と呼ぶ。また利用しうる／しえないものを含む外的刺激の総体を、そのシステムにとっての「環境 Umwelt」と呼ぶ。

ここで言われる「システム」は、その都度のコミュニケーションにおいて、パターンを成さず、当てにできない偶発的な「環境」に取り囲まれ、またその展開・変更の可能性を

環境の中から利益を引き出しつつ、より「当てになる・確からしい」コミュニケーションを予期し、その予期にいわば“賭け”続けることができる、そのような本質的に不安定な事態である。外部（環境）との緊張関係・利用関係を含む、秩序の相互選択的・自己生成的でダイナミックな連鎖過程が「システム」の姿である。

社会は様々な種類のコミュニケーション「パターン」及び「システム／環境」を形成している。この観点から、社会システム論は、あらゆる「社会的なもの」を記述しようとする。同時にそれは「社会的なもの」に関する視点変更を提示している。つまり社会的なものを「人が生み出す」のではなく「コミュニケーションが生み出す」と考える。人が存在していて、それらが振舞い・行動し、社会的なものを形成するのではない。むしろ「振舞い・行動の（際限のない・見通せない）連鎖」がまずあり、それこそが「人」の観念を含めたすべての社会的なものを形成する、と考える。ここにある視点変更は、社会における様々な価値づけ・イメージの固定化を、少なからず融解させてくれるであろう。また「システム／環境」という区別を通して、一定のコミュニケーションにおける自己生成的な場面とそうでないものとの関係に対する示唆を与えてくれる。

3. 相互作用システム／環境

さらに理論的な迂回を続けよう。社会システム論は、諸々の社会的なものの中で「相互作用」（ここでは「対面的相互作用 face-to-face interaction」）を、一つのシステムとして理解する⁽¹⁰⁾。それは“人々がその場に居合わせるだけで何事かが起り、それが維持される”という端的な事実を捉えようとする。相互作用システムは、人々が「その場に居合わせる／居合わせない」ことを境界とする知覚 - コミュニケーションのシステムであると定義される。以下、「相互作用システム」の基本的な機構を説明しよう⁽¹¹⁾。

知覚反照性: 人々は「その場に居合わせる anwesend」とき相互に知覚し合う。そこでは、相手の振舞を知覚して自分の振舞を選択する、逆に自分の振舞の選択が知覚されることによって相手が振舞を選択するというかたちで、相互の振舞 - 知覚における選択過程が生じている。これは「知覚の知覚の知覚 ...」（知覚する／されることを知覚する／されること

を知覚...) ないし「知覚反照性」による振舞の選択過程の形成である。

知覚反照性に内在する限り、一つの振舞の知覚は、単なる身体の動きの知覚ではなく「振舞の選択」の知覚である。つまり、他にもありえた一定の振舞の可能性の中から選ばれた振舞の知覚であり、すでに何らかの「意味」を帯びた振舞の知覚である。しかし、どのような振舞の可能性（選択肢）の中から、なぜあの振舞が選択されたのか、その振舞の「意味」は何であるのか、は確定しえない。ただ“こんなことをしたんだろうな・そうしたはずだろう”といった「予期」によって振舞の選択肢が制限され、それに頼って（それを当てにして）相手の振舞を弁別し、それに応じて自らの振舞を選択する、この連続的過程があるだけである。

境界の形成：知覚反照性による選択過程の連続は、それ自身によって固有の境界を、つまり「その場に居合わせる／居合わせない an/ab-wesend」という差異による境界を形成する。これは物理的空間上の境界を助けにする場合も多いが、基本的に振舞 - 知覚の相互選択が働いているか否かによって可変的に形成される。この境界形成を通して、相互作用は「それ自身」（相互選択が働いていることそれ自身）を、それ以外の事柄から区別している。言い換えれば、相互作用は自らを一つの「システム」として、それ以外のすべての事柄を「環境」として区別している。また区別することによって、必要があればその環境にアクセスし、相互作用のためにそれを利用することも可能になる。

ここで「環境」とは、相互作用システムでないものすべてである。つまり、その場を構成している様々なモノ（仕切・テーブル・いす・部屋）、またそこに居合わせている「人」さえもまた、相互作用（振舞いの選択過程それ自身）にとっての環境である。あるいは、居合わせている人の社会的な背景や役割・制度なども、相互作用「それ自身」からすれば、やはり環境に属する。

言葉（人称と話題）：知覚反照性による選択過程・境界形成に加え、相互作用は「言葉 talk, speak）を通して選択過程における「拘束・結合」の度合いを著しく強める。そこで相互作用は、より容易に（確からしいかたちで）進行する。そこでの最も基本的なオペレーションが、“わたし／あなた／だれ”といった言葉で指し示される「人称 person」である。つまり相互作用に入る前に「人 person」がいるのではない。むしろ“私は～・君は～”とすることで、相互作用の中で振舞の選択を帰属させる宛先としての「人＝人称」が設定され、それに拘束されることが予期される（当てにされる）かたちで振舞のパターンが形成される。

また“あれ／これ／それ／どれ／なに”といった言葉を通して「話題」（テーマ）が設定される。そこで相互作用は何か共通の関心に向けられ、やはり振舞の選択が著しく拘束されることになる。話題は、とりとめもない「おしゃべり」のように相互作用の中で次々に替えられる場合もあれば、会議などのテーマのように、あらかじめ設定されていたり固定されている場合もある。いずれにしても「話題」は、相互作用をその都度統覚し、振舞の選択過程を秩序づけるための基本的な装置である。

相互作用システムは、「知覚反照性による選択」と「言葉による選択過程の強化・集中」を同時に働かせる。つまり「言葉にならない」曖昧な身体的なメッセージが行き交うと同時に、言葉による知覚関係の捨象・抽象が常に生じている。このことは、相互作用が「その場に居合わせること」を超えて営まれる社会的なもの（組織や制度、そこで生じる社会的背景・役割、また文字・書物などのメディアによるコミュニケーション）には発展しえないこと、そのような相互作用システム自身における限界を示す。そしてここにある限界が、社会における特有なシステム生成として、他の「社会的なもの」と区別される条件となっている。

4. 困惑・困難・可能性としての現場

相互作用の概念は、個人的な性格にも社会的な類型・制度にも還元されえない社会秩序の創発的過程を指し示す。これは「物事に固有の何か、現に（実際に）行われ・生み出されつつある」と同時に「複雑な環境下で起こる故に、原則通り・思い通りには事が動かない」場所という意味での「現場」の概念と重なる。現場と呼ばれるものを「相互作用」という概念の下で、上手く捉えることができるのではないだろうか。少なくとも、例えば看護・介護の現場や教育現場、カウンセリングなどのように、対面的相互作用を実質的な条件とする現場がある。

もちろん「現場」と「相互作用」は同じ事柄を指し示すわけではない。相互作用は、単なる人々の会話のように、何時でも・何処でも起こりうる社会の中の可能性である。他方で現場は、病院や福祉施設・学校・職場・家庭などといった諸々の組織や機能、そうした社会的文脈を前提とする。またいじめやセクハラのように、特に何らかの社会問題として

強く価値づけられ、特定のイメージによって語られる場合もある。これらは相互作用システムの「環境」にあるものとして、現場を規定し・現場が利用できる事柄である。要するに現場は、固有の環境（社会的なリソース・攪乱要因の総体）と、それらに取り巻かれながらもそれらには還元されえない相互作用システムを、ひとまとめにしたものである。

これは次のようにも言える。すなわち現場とは、相互作用システム／環境の「差異」である。この差異を通して、相互作用システムの活動が「自ら」を捉える（また捉え損なう）こともできれば、諸々の環境に言及する（そして利用したり無視したりする）こともできる。またこの差異を通して、他方では環境の側にある一定のコミュニケーション（例えば制度・組織や社会的役割、科学、道徳など）が相互作用システムを捉える（また捉え損なう）ことも可能になる。現場とは、このように（特に相互作用）システム／環境の「差異」を通して異なる様々な観点から捉えられる（捉え損なわれる）場所であり、またそうした異なる観点を持っている場所である。既に述べた現場の「多」価値性も、このことに関係がある。

さて、そうなると、私たちは「現場を捉える」ために、何らかの観点を選択しなければならぬように思える。例えば、ここから現場を「相互作用システム」と諸々の「組織システム」や社会の「機能システム」との構造的なカップリングとして（社会学的に）観察・記述することが可能であり、それが社会システム論の選ぶ観点である。しかし他方、現場に含まれる幾つかの観点到配慮しつつ、相互作用それ自身や環境の側にあるコミュニケーションが相互作用を「捉え損なう」場面に着目することもできる。そこから現場の諸問題を、相互作用「自ら」が持つ可能性との関連において見渡すことができるように思える。本稿では後者の立場を採ることとする⁽¹²⁾。

現場で生じている相互作用は各々の状況によって千差万別である。しかし何らかの共通するものによって特徴づけられもする。病院で、学校で、職場で、家庭で、何かが現に生成しつつある。その「何か」は複雑で、おそらく当事者たちにとっても意のままにならない、上手く処理できず、説明できない困難・困惑に満ちた場所である。ここでは特に、順調に進行しない「困難・困惑としての現場」あるいは相互作用それ自身が持つ逆説的な状況に着目してみる。

相互作用の操舵困難・破綻：相互作用は、それが身近な関係として形成されているにもかかわらず、当事者によって操舵困難であると感じられることが多い。これは当事者の相

相互作用が濃密になるほど顕著になり、極端な場合には相互作用そのものが破綻する。例えば看護師の燃え尽き症候群や、家庭内虐待、いじめ、学級崩壊など。当事者間でもコントロールできない相互作用自身のエスカレート（による破綻）である。相互作用に集中するが故に相互作用が操舵困難・破綻に陥る、という逆説がここに見られる。

役割崩壊と相互作用の生成：相互作用は、社会的役割（例えばケアする／される人、カウンセラー／クライアント、教師／生徒、親／子、上司／部下など）によって大きく規定される。にもかかわらず、相互作用の中で役割が崩壊する場面がある。しかも崩壊の場面において相互作用が上手く働く場合があり、役割からの解放として肯定される。役割崩壊が、優れた意味での「現場」を示唆しているとも言われる。ここには、社会的役割が相互作用を規定すると同時に相互作用の生成を阻害しもする、という逆説がある。

因果的な説明・反省の困難：相互作用は、原因／結果の図式で容易には把握できない。それゆえ客観的に記述し反省することも困難となる。特に科学的（因果的）把握を強力に要請する医療分野では、この問題は決定的な欠陥と映る。ところがこの困難や欠陥が、相互作用における「力」や「技」として積極的に語られもする。ここには現場の言語化をどう考えればよいか、という問いがある。因果的説明要求が強まればそれだけ説明（言語化）困難に陥り、またその困難が積極的に語られるという逆説が、ここに横たわっている。

組織・制度による不可視性：相互作用は、組織や制度を通しては見えない。現場の人から“現場はそんなものではない”と言われるが、誰が当の現場を正確に把握できているのか。実は当事者も明確な答えを出せないことが多い。せいぜい“現場は組織や制度とは異なる力学によって動いている”と言われるに過ぎない。またプライバシー保護・守秘義務などによって、現場の人々が現場を“見せない・見られたくない”こともある。組織・制度を前提としながら組織・制度を通して「見えない」という逆説がここにある。

道徳的価値づけ・イメージ：相互作用に伴うこうした諸々の困難・困惑から、ちょうどそれを打ち消すかのように、現場が「美しい関係」として語られる。あるいは人間関係のある種の理想的イメージのもとに現場の重要性が強調される。特に医療・福祉における「信頼関係」、ケアにおける「共感」の強調、また「家族の絆」といった言葉。これらの言葉は、現場の相互作用一般を人間の理想的関係として解釈するものである。現場の相互作用が生み出す固有な過程を道徳的に価値づけし、それがかえって（つまり逆説的に）現場を見えなくする要因にもなっている。

以上のような「困難・困惑」は、社会において「現場の問題」とされているものとは、少し位相が異なることに注意したい。例えば「いじめ」と言われる教育現場の「問題」と、いじめそれ自身やいじめに関わる人たちの相互作用における「困難・困惑」とは、全く別の事柄ではないにせよ、やはり異なるように思える。あえて言えば、「問題」は“解決されるべきもの”という、あらかじめ負の価値づけを持ったものであり、社会による一般化ないし構成を前提にしている。これに対して「困難・困惑」は、問題を問題として一般化ないし構成すること自体の困難・困惑も含んでおり、解決されるべきものと言うよりは、むしろ“自ずと生じる”ものである。それゆえに困難・困惑は、それを肯定すべきもの、現場の問題を解決する（またその構成を組み替える）「可能性」を含んでいると言える。

5. 現場に対する視点変更：一時解除と生成肯定

現場の「困難・困惑・可能性」は、多くの場合、どのようにして「相互作用」の固有な営みを捉え、またその豊かな展開を確保できるか、という点に帰着するように思える。そこで以下、相互作用システム／環境の概念から、それが現場に対してどのような視点変更をもたらすかを「学級崩壊」の問題に即して考えてみる。視点変更のポイントは次の二点である。

- ・自ら生成する固有のダイナミクスから、社会的な文脈性を一旦切り離して捉えうる（一時解除）
- ・複雑性・偶発性から生成する自己変容・自己展開を、積極的な契機として肯定する（生成肯定）

現場の「問題」を把握・解決・改善するために、その諸要因（原因）が探られ、対処が模索される。多くの場合、それは社会役割や制度的・組織的な、つまり相互作用の「環境」を成す事柄への言及に帰着する。なぜなら問題の個々のケースを捉えようとすれば、そこには無数の要因が絡み合っているのは明らかであり、それらを偶発的なものとして捨象することで、現場の「問題」が一般的に観察されうるからである。例えば「学級崩壊を引き

起こす要因」として、次のようなリストが作られる。

(1) 子どもの変化による要因

- ・ 集団学習に溶け込めず、多動で授業時間に他と同様に活動できない子が増えている。
- ・ 我慢する経験が乏しく、自己を抑制することの苦手な子が増えている。
- ・ 厳しく叱られたことがなく、苦難に打ち克つ耐性が欠落している子が多い。
- ・ 生育歴から群れて遊ぶ経験が少なく、人間関係を創り出す力が不足している子が増えている。
- ・ 基礎学力の低下によって、授業に能動的に参加しようという意欲の感じられない子が増えてきている。
- ・ 無気力・無関心・無責任・無感動で物事を正面から受け止め、自己実現を図ろうとする活動的な子が減少している。
- ・ インターネットの流行によって、好ましくない情報までも簡単に手に入れる子が増えている。
- ・ 携帯電話・メールが子どもの世界に入り込み、これらが顔の見えない陰湿ないじめの温床となっている。
- ・ 24時間営業のコンビニが増え、小学生でも夜間に集える場所が増えている。
- ・ スマート指向がよくなり、精神論的な根性や忍耐の錬磨を揶揄する風潮が学校現場にも浸食しつつある。

(2) 教師・学校の変化による要因

- ・ 教師に集団の統率力がなく、力強く子どもを引っ張るエネルギーがない。
- ・ 学習指導能力が低く、授業に魅力と迫力のない教師が増えてきている。
- ・ 子どもの変化について行けず、子どもの心の奥底に迫ることのできる教師が少なくなっている。
- ・ 密室状態のような学級担任性であるため、他のクラスと比較して自分のクラスの子どものみを冷静に見つめることができない。
- ・ 教師も本気で叱られた経験が少なく、恥をかいてまで指導や相談を受けようとしないため、手遅れ状態になる事例が少なくない。
- ・ 種々雑多の校務分掌の業務や会議で、放課後の子どもとの触れ合いが少なくなっている。

- ・基礎学力を向上させるための授業時間数の確保が最優先され、子どもに共同体的感性を育む潤いのある行事が減少している。
- ・安全性を優先することに重きが置かれていることによって、学校で子どもが思い切り体を動かす環境が少なくなっている。
- ・総合的な学習や英語教育、学校選択制の導入などの対応に追われ、子どもの心の叫びに耳を傾けにくくなっている。
- ・悪しき平等感が学校教育に閉塞感をもたらし、子どもたちに対して自己啓発の刺激を奪ってきている。

(3) 保護者の変化による要因

- ・保護者の教育方針が過干渉と放任に二極化しつつある。
- ・頑固親父的な存在が家庭からも地域からもなくなってきた。
- ・学校不振の保護者が増加し、学校教育への期待感も低下傾向にある。
- ・PTA 役員のなり手がなく、保護者会などの参加率も低下傾向にある。
- ・学校選択制の拡がりによる影響からか、「学校も先生も選ぶ時代」であるとの志向が保護者に蔓延しつつある。
- ・そこで、学級の危機を教師とともに乗り切ろうとするよりも、「担任を交代させろ」と要求する保護者が増えつつある。
- ・子どもの個室や孤食など、家庭内で子どもと面と向かって学校の話話を話す機会が減少している。

(4) マスコミによる要因

- ・学級崩壊などに対するマスコミの取り上げ方が一方的で表面的なものが多く、保護者の不安感を増大させるものが多い。
- ・学校を題材としたテレビドラマの内容が過激すぎて、子どもたちの非行に対する感情を煽動するケースがある。
- ・バラエティ番組の出演者の行動や言葉遣いが粗野で、子どもたちはそれらを当然のように受け入れている。
- ・有害なインターネットサイトや低俗な図書が、性の尊厳や貞操観念まで歪曲させ、性教育の根幹をゆるがせてしまっている⁽¹³⁾。

学級崩壊（を含む教育現場）における「問題」とその解決・改善・予防をめぐる、ここに様々な言説が行き交う。しかし、これらの「要因」は、社会の一般的傾向や制度的制約を挙げたものであり、個々の学級（＝相互作用システム）における崩壊の因果的な「原因」と見ることはできない。こうした言説は現場＝相互作用の単なる「環境」把握に立脚しているのであり、現に生成している学級崩壊（＝相互作用システム）それ自身を遠巻きに、しかも抽象的な因果性に基づいて観察しているに過ぎない。

またここには、学校教育に関わる諸制度や人々（子ども・教師・保護者）、また社会に対する無数の価値・イメージが読み取れる。様々な要因を枚挙することと平行して、様々な「あるべき／べきでない・あってほしい／ほしくない」といった価値判断が、また様々な「増える／減る傾向にあるもの」、子どもや教師や保護者やマスコミが「そうしたものである」というイメージがちりばめられている。これら「価値づけ・イメージ」は、問題の見方・問題への臨み方を構成する「フレーム」として、容易に手放されえない頑固なものである。しかし、これもまた、個々の相互作用システムを「一般的に」観察しているに過ぎないと言える。

価値・イメージは、相互作用を含む社会的コミュニケーションの再帰的過程の中で形成され、強化・固定されたものである。私たちが社会の中で経験する事柄は、多かれ少なかれ、他の誰かによって（コミュニケーションの継起・編目を通して）経験されたことの確認であり、また自分の経験を語ることが他者の経験の確認を促す。そうした再帰的過程の中で経験が一般化される。そこには、人々が“当てにする”ことのできる一定の「パターン」が出現する。それは私たちが事柄を理解・予期する際に、そして事柄に臨む際に働くフレームである。

要因リストは、教師を長年にわたって「経験」してきた著者によるものである。それは教育の現場を経験しつつ、その中で確認され続けてきた「事柄を理解する仕方・事柄に臨む仕方」のリストでもある。つまり多くの経験から帰納的に導き出された単なる「事実」の集積ではなく、「事実の見方・事実への臨み方」の集積である。それ故に、経験の少ない教師や教育現場の外から個別的に「反例」（事実）が出されても、あるいは社会学的調査などによる統計が事実と反する結果を示したとしても、著者の「経験」に基づいた「見方・臨み方」は、簡単には揺るがない。またそれは、現場を経験している人々だけのものではない。現場の外にいて、差し当たって現場に直接関係のない人々もまた、現場に対する価値づけ・イメージを持っている。それは主にマスメディアを通してパターン化されている。

マスメディアもまた、単なる事実を知らせるものではなく、その「見方＝フレーム」の下に特定の事実を切り取って（選択して）知らせる、コミュニケーション過程の一部である。

現場の問題を、因果的・制度的な要因から、また何らかの価値・イメージの下で理解することは、ある意味で不可避である。しかしそれは、現場＝相互作用システムの「環境」と見なされる限りにおいて“とりあえず脇に置く”ことができる。少なくともそう考えて、現場に付着する様々な因果的・制度的・価値的想定を“少し醒めた仕方・少し距離を置いて”考え直すことができる。これが「一時解除」の発想である。そこで次に「相互作用システム」それ自身に着目することで、何らかの変更・展開が促される場面を考えてみよう⁽¹⁴⁾。

授業開始5分たっても英典・明が戻ってこない。(…)10分ほどたってからようやく戻ってきた。しかし明は机に着いても、ハンカチを取り出して赤ずきんちゃんのように顔を包み、英明の方を向いてにやりと笑う。それを見て英明も、真似をしてハンカチで顔を包んで授業に参加しようとしなない。

この二人は私立中学への進学を志望していて、普段は授業に夢中になることも多い生徒である。普通であれば、教師はこういった事情を把握していても、単純に苛立って、授業に集中するように注意しがちである。しかし、山崎先生のこのときの二人への対応は、頭ごなしに注意するものとは正反対であった。(…)山崎先生は、授業のこの時間が彼らの内側の快さと響き合っていないと感じとっている。先生はその過程を暴いたり叱りつけたりすることが、教師の感情の処理でしかないことを知っている。そこで「子ども自身の内部の葛藤のゆくえを待つ」という姿勢をとる。

二人の子どもたちもときどき先生を見つめ、意識している。(…)山崎先生は、彼らの気持ちが落ち着いたころあいのみはからって声をかける。彼はこのときの声かけを、「無視というのは彼らを傷つけるから」と説明している。このあと、英典は「先生、ぼく、本を読みます」と言って、授業に参加するのである。

ここで挙げた場面はわずか十分間のことである。山崎先生は、自身の内面に沸き起こる怒りや焦りの感情をそのまま表出することはない。また、子どもの授業妨害行為を私学受験によるストレスという単純な因果帰属で片付けようとはしない。子どもがそのストレスを自分で処理する時間を与えるという逆帰属を行っている。その新たな帰属の見いだ

しは、決して子どもを授業に参加させるための技術ではなかった。それは、子ども自身が授業において自分の存在を見いだすための機会を用意するものであった。

山崎先生は、授業という相互作用の場面で教師の役割を部分的に捨て、子どもに何らかの変化が生じること、その「ゆくえを待つ」。ここで重要なのは、教師が生徒の「心の叫びに耳を傾ける」ことでも、「子どもを冷静に見つめる」ことでも、まして「集団の統率力・力強く子どもを引っばるエネルギー」でもない。そうした「一般的」な価値づけ・イメージから行動するのではなく、むしろ「今、ここ」で生じている相互作用それ自身の変容・展開に期待する生成肯定的な態度である。もちろんこれは、相互作用における自己変容・自己展開を単に闇雲に容認することではない。上の例にしても、毎日の授業の中の偶発的な生成場面を再構成したものであって、いつもこのような劇的な変容が生じているわけではない。それにもかかわらず、先を見通せない相互作用をあえて授業の中に開き、そこから創発的秩序形成の効果を期待することには十分な意味があると思える。

そこでは、出来事の弁別・選択過程における「複雑な」継起・編目としてのコミュニケーションを、まずは肯定することが出発点になる。複雑性とは、その過程において「全体が見通せない」「先回りできない」ことであり、それ故に、秩序（パターン）が自ずと生み出されることである。事態を因果的に見通せない・先回りできないものとして消極的に理解すれば、現場にある自己変容・自己展開の契機が見逃される（否定される）。したがって事態の複雑性・偶発性を肯定するといっても、それはあくまで相互作用システム自身の「生成過程」に着目する限りでの現場の肯定である。システム論の相互作用概念は、現場で生じた事柄に対して「何が原因で／どんな結果に」とは問わない。むしろ「その場に居合わせる」限りで現場が「どのように生成するか」を問うのである。

6. 現場への関わり：触媒としての哲学

固有の何かが現に生み出されつつあるのだが、複雑で原則が通用しない場所としての現場。また、他の活動域・実践域を介して価値づけられイメージされる場所としての現場。社会の至る所に、こうした「現場」がある。私たちは、それを諸々の制度や因果関係には

還元されえない、あるいは社会的役割や人間関係（「人」を構成要素とした関わり合い）とは異なる「相互作用システム／環境」の生成領域として理解しようとしてきた。そのような視点変更の可能性について考察してきた。最後に、ここからもう一步、社会の現場に関わる可能性について簡単に触れておこう。

現場の相互作用は、それ以前に営まれていた膨大な相互作用の重なりの上に形成されている。現場は一回きりの相互作用から成るわけではなく、授業・問診などの同種の相互作用が日々積み重ねられ、また会議・相談などの別種の相互作用に接続されることで成り立っている。その中で、固有の「困難・困惑」が気づかれもすれば、無視され・見落とされもする。また自らの「可能性」を発見しうるし、隠蔽しうる。現場の困難・困惑・可能性は、こうした「相互作用の重なり・接続」の中で顕在化・潜在化していると言える。

現場の困難・困惑について、現場自身が思考し、自らを変容・展開させていく可能性。それはこの「重なり・接続」の内に存している。また、相互作用を反省（reflect: 反照・反射）する相互作用の内に存している。現場の「思考・反省」という位相を捉えようするとき、特権的な（現場をよく知る・現場に詳しい）観察主体を想定するのではなく、むしろこの「相互作用の重なり・接続」が思考・反省していると思わせる。例えば家族療法において、医師たちの治療に関する話し合いを患者・家族にも見せることで、患者／家族の相互作用を変容させる（＝治療する）「リフレクティング・チーム」という方法がある⁽¹⁵⁾。そこでは家族の困難・困惑が治療の相互作用へと接続されるのであるが、それが従来の治療のように一方的にではなく、患者・家族に反照的に接続される。そのことで、家族の相互作用が、また医療者・家族の治療的相互作用が、自ら潜在させていた「困難・困惑・可能性」に気づき、自らの相互作用を変容させる。

こうした工夫は、相互作用としての問題が相互作用自身を通して反省（＝反照）される回路を設けることだと言い換えることができる。上のような「治療＝相互作用の劇的変容」という強い医療的文脈でなくとも、家族・友人間でのちょっとした相談、日々の現場の営みやルーチンの合間で行われる申し送り、仕事を振り返るために場を改めて設けられるミーティングなども、広い意味で「反省の回路」である。先の山崎先生の授業で、先生が生徒を叱らずに「ゆくえを待つ」という姿勢を取り、落ち着いた頃合いで「声をかけ」たのも、ある意味で相互作用（授業）の中に瞬間的に設けられた反省の回路と言える。現場が自らの問題をコミュニケーションするために、そこに接続できる具体的な「反省の回路」の形として、例えば次のようなものが考えられる。

- 企業・経営コンサルティング（コーチング、ファシリテーションなど）⁽¹⁶⁾
- 心理カウンセリング（個人を対象にしたものから「グループ」カウンセリングまで含む）
- 地域社会での「寄り合い」（まちづくり・都市整備などのための組織的なワークショップ）
- コンセンサス会議（科学技術や地域の諸問題を行政・専門家・市民のレベルで話し合う会議）⁽¹⁷⁾
- 哲学プラクティス（哲学カウンセリング、哲学カフェ⁽¹⁸⁾、ソクラテック・ダイアローグ⁽¹⁹⁾など）
- その他、様々な目的で行われる会議、研修、ワークショップ

まず重要なことは、相互作用を通じたコミュニケーションの回路、現場が現場を思考する場として捉えることである。こうした回路を通して、現場の人々が、また現場に直接関わりのない人々も交えて、現場を思考・反省することができる。それは現場を、個人の努力・自覚や組織・制度による改善（これらも必要であるが）とは異なる仕方、すなわち「現場のさらなる相互作用の接続」という仕方考え、工夫していく可能性を示唆する⁽²⁰⁾。

また、こうした反省の回路は、何を目的に・どのような話題で、どのような人々が関与するかといった事柄に関して多様である。言い換えれば、現場のさらなる相互作用の接続には、様々な異なる次元・種類のチャンネルがある。これらの在り方をどのように捉えることができるのか⁽²¹⁾。組織や社会の中で、どのようにデザインしていけるのか。こうしたことも、課題として浮かび上がってくる。

いずれにしても結論は「現場“を”思考することから、現場“が”思考することへ」である。ここには思考の主体に関する転換がある。またこれに伴って、現場にいない者の現場への関わり方に関する発想の転換が求められる。それは、現場に入って（つまり制度的・社会役割的に現場を担ったり、そこに深く関わったりして）現場の諸問題を思考する、というのではない。むしろ現場の人々を「現場から（一時的に反省の場に）連れ出す・誘い出す」のである。現場から一旦解除されて、現場の問題や可能性を反省する回路を設けること、そこで「現場が思考する」場を開くことである。

この転換は思考の「方法」にも関係する。例えば「反省の回路」の場で、現場の人々に対して「さあ思考して下さい、反省してください」と言っても思考は始まらない。またそ

こは、何らかの思想（先人の思考・反省の結果）や理論（ものの考え方、上に紹介してきた「システム論」も含めて）によって思考・反省の仕方をガイド（教示・指導）する場でもない。そんなことをすれば、現場の思考は停止する。こうした態度は、現場の人々が何かを教示・指導して欲しいと願う態度を含めて、すでに思考・反省されたものの啓蒙でしかない。むしろ反省の回路は、その仕掛・工夫を通して、現場における相互作用の生成（そこに思考・反省も含まれる）を促進・支援する、その反応速度を加速させるような「触媒」装置と見なされるべきである。

それゆえ「現場の哲学」というものがあるとすれば、それは次のような方向性の下に位置づけられるであろう。すなわち、思考する／しない「主体＝人」を前提にした啓蒙的（ないし伝達的）な枠組みを解除して、思考する／しない「相互作用システム」を前提にした触媒的（ないし演算＝オペレーショナル的）な仕掛・工夫を模索することである。

〈付記〉

この論考は、2007年度夏、大阪大学大学院文学研究科の集中講義で準備した草稿（ソクラテック・ダイアローグの紹介部分は除く）を加筆・修正したものである。講義に臨席して下さった家高洋さん・三浦隆宏さんには、多くの示唆をいただいた。それらを含め、講義中に出されたいくつかの疑問に答えるべく論文に反映させた（つもりである）。両氏をはじめ、授業に参加し熱心に質問してくれた学生のみなさんに感謝する。

注

- 1 この「～という現場」といった表現には、他に「中坊公平という現場」「京都という現場」「日本という現場」など、まさしく固有名とともに使われる用法がインターネットに散見される。
- 2 <http://www.hatena.ne.jp/>、キーワード「現場」で検索。
- 3 野外科学とは、地震学、地理学、地質学、地形学、砂防学、海洋学、動物学、動物行動学、植物学、文化人類学、土木工学など「現場 field」をベースにした科学を指し、書齋科学、実験科学と区別される。[今村 2006:「はじめに」(i) および p.2] 参照。
- 4 [須藤 2002: p.24]。
- 5 この表現は [池田 2007: p.30] から借りてきた。池田は須藤 [2002] の「現場という言葉に付与された「貶め」と「賞賛」という相矛盾したイメージ」に着目し、この表現を使っている。さらに須藤は [鷲田 1997: p.42]

の「一度はもち上げられ、一度は貶められる」という言葉を引いて、現場における二重価値性を強調している。

- 6 代表的な社会システム論者として、タルコット・パーソンズ、ニクラス・ルーマンが挙げられるが、ここでは主としてルーマンの理論に依拠する。
- 7 ルーマンは、その膨大な著作の中で何度も・至る所で自分の理論の鍵となる「コミュニケーション」および「システム／環境」の概念について説明している。理論的な概念体系を示した著作として [Luhmann 1987: *Soziale Systeme*, 1997: *Gesellschaft der Gesellschaft 1/2*] などがあるが、これらも大著である。そこでコンパクトな理論用語辞典として [Baraldi/Corsi/Esposito 1999: *GLU*] が有用。また優れた解説書として [馬場 2001] [長岡 2006] などを参照。
- 8 特に「コミュニケーション」の概念を中心に社会システム論を展望したものとして [Baecker 2005] を参照。そこでシャノンの情報理論に依拠しつつ「コミュニケーションの伝達概念 Übertragungsbegriff der Kommunikation」から「情報の選択概念 Selektionsbegriff der Information」への視点変更が強調されている (p.10-11)。また本論文で「演算モデル」としたのは、同書に言う「サイバネティクスのコミュニケーション概念」が提示した「再帰性 Rekursivität」の概念 (p.25) を念頭に置いてのことである。さらに「演算 operation」の概念については [Baraldi/Corsi/Esposito 1999: *Operation/Beobachtung*, p.123] 参照。
- 9 「パターン」という言葉はルーマンの理論用語として明確な位置を持っているわけではないが、それをさらに厳密に説明する用語として「コミュニケーションメディア」あるいは「メディア／形式 Medium/Form」の区別がある。[Luhmann 1997: *kommunikationsmedien*, pp.190-412] 参照。本論文ではこの文脈で、メディア (媒質) に対する「形式」の生成を「パターン」と読み替えて説明した。
- 10 「対面的相互作用」に着目したのとしてゴッフマンの社会学が最初に挙げられようが、ここではその理論的な枠づけと明快な定義から出発する社会システム論の「相互作用」概念に絞って考察する。
- 11 以下の説明は、次のような文献を参考にしてまとめたものである。
[Luhmann 1975: *Einfache Sozialsysteme*, pp.25-47] [Luhmann 1987: *Gesellschaft und Interaktion*, pp.551-592]
[Luhmann 1997: *Interaktion und Gesellschaft*, pp.813-826] [Baraldi/Corsi/Esposito 1999: *Interaktion*, p.82]
- 12 この点で、本稿はルーマンの社会システム「理論」から逸れていくことになる。代わって、同じくシステム論的な枠組みから相互作用コミュニケーションにおける学習・変容 (また治療) に論及するワツラウィックやアンデルセンの考え方に近づく。後者は、相互作用への相互作用的な「介入」による効果を視野に入れている。
- 13 [小谷川 2007 : pp.16-19]。
- 14 [石戸 2007 : pp.137-139]。ここ紹介されている「山崎先生」は [今泉／山崎 1998] の報告に基づいたも

のである。

15 [アンデルセン 2001] 参照。

16 特に企業組織における「学習」の意義を提示したものとして [Senge 1990]。さらにファシリテーションの形や意義を示すものとして [中野 2001] [堀 2003] などを参照。

17 [小林 2002] 参照。

18 [ソーテ 1996] [本間／高橋／松川／榎本 2007] などを参照。

19 [Kessels 2001] [臨床哲学のメチエ 2000] [Kopferwerk Berlin 2005] などを参照。

20 本稿では触れなかったが、以上のような反省の回路における「仕掛け・工夫」の在り方については、それぞれの回路の形態に応じて具体的に考察される必要があるだろう。そのモデル開発の一つの試みとして[本間／堀江 2003] および [堀江 2004] における「対話コンポーネント」を参照。

21 反省の回路・相互作用の接続の可能性を、社会システム論の知見を用いて再度捉え直すことができるし、また必要なことであろう。本稿では、これを一つの「今後の課題」として確認するに止まる。

文献表（論文引用順）

- 今村遼平 (2006) 『フィールドロジー（現場の知）：現場での見方・考え方』電気書院。
- 須藤八千代 (2002) 「ソーシャルワークの経験」、尾崎新編『「現場」のちから：社会福祉実践における現場とは何か』誠信書房。
- 池田光穂(2007)「〈現場力〉について：言葉による概念の受肉化」大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」研究報告書第 8 巻『臨床と対話』（中岡成文編）、pp.27-41。
- 鷲田清一 (1997) 『現象学の視線：分散する理性』講談社。
- Luhmann, Niklas (1987) *Soziale Systeme: Grundriß einer allgemeinen Theorie*, Suhrkamp. (『社会システム論 上 / 下』恒星社厚生閣、1993/1995)
- Luhmann, Niklas (1997) *Gesellschaft der Gesellschaft* (2 Bde.), Suhrkamp.
- Baraldi, Claudio / Corsi, Giancarlo / Esposito, Elena (1999) *GLU: Glossar zu Niklas Luhmanns Theorie sozialer Systeme*, Suhrkamp.
- 馬場靖雄 (2001) 『ルーマンの社会理論』勁草書房。
- 長岡克行 (2006) 『ルーマン／社会の理論の革命』勁草書房。
- Baecker, Dirk (2005) *Form und Formen der Kommunikation*, Suhrkamp.
- Watzlawick, Paul / Beavin, Janet H. / Jackson, Don D. (1967) *Pragmatics of Human Communication: A Study of Interactional Patterns, Pathologies, and Paradoxes*, W. W. Norton & Co. Inc. (『人間コミュニケーションの語用論：

- 相互作用パターン、病理とパラドックスの研究』二瓶社、1998)
- Luhmann, Niklas (1975) *Soziologische Aufklärung 2*, VS Verlag. (『社会システムと時間論』新泉社、1986)
 - 小谷川元一 (2007) 『教師と親の「共育」で防ぐいじめ・学級崩壊』大修館書院。
 - 石戸教嗣 (2007) 『リスクとしての教育：システム論的接近』世界思想社。
 - 今泉博・山崎隆夫 (1998) 『なぜ小学校が“荒れる”のか：学級解体の危機を超えて』太郎次郎社。
 - トム・アンデルセン (2001) 『リフレクティング・プロセス：会話における会話と会話』金剛出版。
 - Senge, Peter M. (1990) *The Fifth Discipline: The Art & Practice of The Learning Organization*, Currency Doubleday. (『最強組織の法則：新時代のチームワークとは何か』徳間書店、1995)
 - 中野民夫 (2001) 『ワークショップ：新しい学びと創造の場』岩波新書。
 - 堀公俊 (2003) 『問題解決ファシリテーター』東洋経済新聞社。
 - 小林傳司 (2002) 「社会的意思決定への市民参加：コンセンサス会議」『公共のための科学技術』玉川大学出版部。
 - マルク・ソーテ (1996) 『ソクラテスのカフェ』紀伊国屋書店。
 - 本間直樹・高橋綾・松川絵里・榎本直樹 (2007) 「哲学カフェ探求：活動とインタフェイス」大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」研究報告書第 8 巻『臨床と対話』(中岡成文編)、pp.127-166。
 - Kessels, Jos (2001) *Die Macht der Argumente : Die sokratische Methode der Gesprächsführung in der Unternehmenspraxis*, Belts Verlag.
 - 『臨床哲学のメチエ』(2000) 総特集：ソクラティック・ダイアログ、第 7 号、大阪大学大学院臨床哲学研究室。
 - Kopfwerk Berlin (2005) 「ソクラティック・ダイアログの方法論：潮及的抽象 ... どのように哲学的認識を求め、見いだすのか」『臨床哲学』第 7 号、大阪大学大学院臨床哲学研究室。
 - 本間直樹・堀江剛 (2003) 「対話コンポーネンツ：臨床コミュニケーションのモデル形成にむけて」文部科学省 科学技術振興調整費 科学技術政策提言『臨床コミュニケーションのモデル開発と実践』平成 14 年度報告書、pp.144-163。
 - 堀江剛 (2004) 「公共的対話の方法：在宅における医療行為をテーマにした対話コンポーネンツの試み」文部科学省 科学技術振興調整費 科学技術政策提言『臨床コミュニケーションのモデル開発と実践』平成 14-15 年度報告書、pp.34-46。

